

日本農業新聞

節税への近道

持続的経営のために

14

「複式簿記は人類が生んだ最も素晴らしい発明の一つ」とは、かの文豪ゲーテの言葉だ。ゲーテの言葉を引くまでもなく、複式簿記は現代社会の屋台骨を支えている。ここでは、身近過ぎて、いつしか埋もれてしまった複式簿記の基本的な考え方を整理したい。

まず、「複式簿記ではない」ものとは何か。すなわち、「単式簿記」とは、入ってくる金と出ていく金を記録し、期末に集計し、入金額と出金額の差から期末の残高を調べるというものだ。「おごづかい帳」を想像してもらっていい。この方式では、入出金の具体的な内容までは把握しきれない。

一方、複式簿記は、金の出入り（結果）だけでなく、その原

貸借対照表		損益計算書	
資産	負債	費用	収益
	純資産	純利益 または 純損失	

複式簿記 純資産、純利益圧縮を

因も記録する。このように取引の原因と結果を記録することが仕訳である。これによって、期末の財産の計算と期中の損益の計算が可能となるため、「貸借対照表」と「損益計算書」を作成することができる。

「貸借対照表」とは一定期間の財政状態を示すもので、資産・負債・純資産という三つの要素から成り立っている。一方、「損益計算書」とは、一定期間における損益の状況を示すもので、収益と費用という二つの要素から成る。収益から費用を引いたものが純利益、または純損失である。

誤解を恐れずに言えば、相続税や所得税は、この純資産あるいは純利益に課される税金である。つまり、節税を考える際に必要となるのは、この二つの図における純資産と純利益をいかに小さくするか、という発想というわけだ。

所得税については、毎年、確定申告があるため「何が『費用』か」という考え方は理解しやすいだろう。一方、相続税の申告はなじみが薄く、多少の混乱が見受けられる。相続税の節税で重要となるのは、いかにして「負債」を掘り出して計上し、「資産」を圧縮するかである。これだけでも念頭に置いていただければ、申告に備えて整理しておくべき資料が見えてくるはずだ。

(リンドマーク税理士法人代表・清田幸弘)